

# 弓町より

石川啄木

青空文庫



## 食うべき詩

詩というものについて、私はずいぶん長い間迷うてきた。

ただに詩についてばかりではない。私の今日まで歩いてきた路は、ちようど手に持っている蠟燭ろうそくの蠟のみるみる減つていくように、生活というものの威力のために自分の「青春」の日一日に減らされてきた路筋である。その時その時の自分を弁護するためいろいろな理窟を考えだしてみても、それが、いつでも翌る日の自分を満足させなかつた。蠟は減りつくした。火が消えた。幾十日の間、黒闇くらやみの中に体を投げだしていたような状態が過ぎた。

やがてその暗の中に、自分の眼の暗さに慣れてくるのをじつと待っているような状態も過ぎた。

そうして今、まったく異なった心持から、自分の経てきた道筋を考えると、そこにいろいろいたいことがあるように思われる。

~~~~~

以前、私も詩を作っていたことがある。十七八のころから二三年の間である。そのころ私には、詩のほかには何もものもなかった。

朝から晩まで何とも知れぬものにあこがれている心持は、ただ詩を作るということによつていくぶん発表の路を得ていた。そうしてその心持のほかに私は何ももつていなかった。——そのころの詩というものは、誰も知るように、空想と幼稚な音楽と、それか



二三年経った。私はその手続にだんだん慣れてきた時は、同時に私がそんな手続を煩わしく思うようになった時であった。そうしてそのころのいわゆる「興の湧いた時」には書けなくなつて、かえつて自分で自分を軽蔑するようないふ心持の時か、雑誌の締切という実際上の事情に迫られた時でなければ、詩が作れぬというような奇妙なことになつてしまつた。月末になるとよく詩ができた。それは、月末になると自分を軽蔑せねばならぬような事情が私にあつたからである。

そうして「詩人」とか「天才」とか、そのころの青年をわけもなく酔わしめた揮発性の言葉が、いつの間にか私を酔わしめなくなつた。恋の醒めぎわのような空虚の感が、自分で自分を考え

る時はもちろん、詩作上の先輩に逢い、もしくはその人たちの作を読む時にも、始終私を離れなかった。それがその時の私の悲しみであった。そうしてその時は、私が詩作上に慣用した空想化の手續が、私のあらゆることに対する態度を侵していた時であった。空想化することなしには何事も考えられぬようになっていた。

象徴詩という言葉が、そのころ初めて日本の詩壇に伝えられた。私も「吾々の詩はこのままではいけぬ」とは漠然とながら思っていたが、しかしその新らしい輸入物に対しては「一時の借物」という感じがついて廻った。

そんならどうすればいいか？ その問題をまじめに考えるには、いろいろの意味から私の素養が足らなかつた。のみならず、詩作

その事に対する漠然たる空虚の感が、私が心をその一処に集注することを妨げた。もつとも、そのころ私の考えていた「詩」と、現在考えている「詩」とは非常に違ったものであるのはむろんである。

二十歳の時、私の境遇には非常な変動が起つた。郷里くにに帰るということと結婚という事件とともに、何の財産なき一家の糊口ここうの責任というものが一時に私の上に落ちてきた。そうして私は、その変動に対して何の方針もきめることができなかつた。およそその後今日までに私の享うけた苦痛というものは、すべての空想家——責任に対する極度の卑怯者ひきょうものの、当然一度は受けねばならぬ性質のものであつた。そうしてことに私のように、詩を作るとい



境遇そのものに非常な力を出して反抗を企てた。その反抗はつねに私に不利な結果を齎もたらした。郷里くにから函館はこだてへ、函館から札幌さっぽろへ、札幌から小樽おたるへ、小樽から釧路くしろへ——私はそういう風に食をもと需めて流れ歩いた。いつしか詩と私とは他人同志のようになっていた。たまたま以前私の書いた詩を読んだという人に逢つて昔の話をされると、かつていつしよに放蕩ほうとうをした友だちに昔の女の話話ををされると同じ種類の不快な感じが起つた。生活の味いは、それだけ私を変化させた。「——新体詩人です」といつて、私を釧路の新聞に伴れていった温厚おんこうな老政治家が、ある人に私を紹介した。私はその時ほど烈しく、人の好意から侮蔑を感じたことはなかつた。

思想と文学との両分野に跨またつて起つた著明な新らしい運動の聲は、食を求めて北へ北へと走つていく私の耳にも響かずにはいなかった。空想文学に対する倦けん厭えんの情と、実生活から獲えた多少の経験とは、やがて私にもその新らしい運動の精神を享うけい入いれることを得しめた。遠くから眺めていると、自分の脱けだしてきた家に火事が起つて、みるみる燃え上がるのを、暗い山の上から瞰みおろ下さすような心持があつた。今思つてもその心持が忘わすれられない。

詩が内容の上にも形式の上にも長い間の因襲を蝉せんだつ脱だつして自由を求め、用語を現代日常の言葉から選ぼうとした新らしい努力に對しても、むろん私は反對すべき何の理由ももたなかつた。「むろんそうあるべきである」そう私は心に思つた。しかしそれを口

に出しては誰にもいいたくなかった。いうにしても、「しかし詩には本来ある制約がある。詩が真の自由を得た時は、それがまったく散文になってしまった時でなければならぬ」というようなことををいった。私は自分のえつれき閱歴の上から、どうしても詩の将来を有望なものとは考えたくなかった。たまたまそれらの新運動にたずさわっている人々の作を、時おり手にする雑誌の上で読んでは、その詩の拙いつたなことを心ひそかに喜んでいた。

散文の自由の国土！ 何を書こうというきまったことはなくとも、漠然とそういう考えをもつて、私は始終東京の空を恋しがつていた。

釧路は寒い処であつた。しかり、ただ寒い処であつた。時は一月末、雪と氷に埋もれて、川さえおおかた姿を隠した北海道を西から東に横断して、着てみると、華氏零下二十一—三十度という空気が凍た<sup>いて</sup>ような朝が毎日続いた。氷つた天、氷つた土。一夜の暴風雪に家々の軒のまつたく塞<sup>ふさが</sup>つた様も見た。広く寒い港内にはどこからともなく流氷が集つてきて、何日も何日も、船も動かず波も立たぬ日があつた。私は生れて初めて酒を飲んだ。

ついに、あの生活の根調のあからさまに露出した北方植民地の人情は、はなはだしく私の弱い心を傷づけた。

四百トン足らずの檻<sup>ぼろ</sup>船に乗つて、私は釧路の港を出た。そうして東京に帰つてきた。

帰ってきた私は以前の私でなかったごとく、東京もまた以前の東京ではなかった。帰ってきて私はまず、新らしい運動に同情を持つていない人の意外に多いのを見て驚いた。というよりは、一種の哀傷の念に打たれた。私は退いて考えてみた。しかし私が雪の中から抱いてきた考えは、漠然とした幼稚なものではあったが、間違っているとは思えなかった。そうしてその人たちの態度には、ちようど私自身が口語詩の試みに対して持った心持ひきように類似点があるのを発見した時、卒然として私は自分自身の卑怯ひきように烈しい反感を感じた。この反感の反感から、私は、まだ未成品であつたためにいろいろの批議まぬがを免れなかつた口語詩に対して、人以上に同情をもつようになった。







そうしてこの現在の心持は、新らしい詩の眞の精神を、初めて私に味わせた。

「食<sup>くら</sup>うべき詩」とは電車の車内広告でよく見た「食<sup>くら</sup>うべきビール」という言葉から思いついて、かりに名づけたまでである。

謂<sup>い</sup>う心は、兩足を地面<sup>じべた</sup>に喰<sup>く</sup>つつけていて歌う詩ということである。実人生と何らの間隔なき心持をもつて歌う詩ということである。珍味ないしはご馳走ではなく、我々の日常の食事の香の物のごとく、しかく我々に「必要」な詩ということである。——こういうことは詩を既定のある地位から引下すことであるかもしれないが、私からいえば我々の生活にあつてもなくても何の増減のなかつた詩を、必要な物の一つにするゆえんである。詩の存在の理

由を肯定するただ一つの途みちである。

以上のいい方はあまり大雑駁おおざっぱではあるが、二三年來の詩壇の新らしい運動の精神は、かならずここにあつたと思う。否、あらねばならぬと思う。かく私のいうのは、それらの新運動にたずさわつた人たちが二三年前に感じたことを、私は今始めて切實に感じたのだということを承認するものである。

くくくくくくくくくくくくくくくくく

新らしい詩の試みが今までに受けた批評について、二つ三ついつてみたい。

「なりとであるもしくはだの相違にすぎない」という人があつた。それは日本の国語がまだ語格までも変るほどには変遷へんせんしていな

いということを指摘したにすぎなかった。

人の素養と趣味とは人によつて違ふ。ある内容を表出せんとするにあつて、文語によると口語によるとは詩人の自由である。

詩人はただ自己の最も便利とする言葉によつて歌うべきである。

という議論があつた。いちおうもつともな議論である。しかし我々が「淋しい」と感ずる時に、「ああ淋しい」と感ずるのであるうか、はたまた「あな淋し」と感ずるであろうか。「ああ淋しい」と感じたことを「あな淋し」といわねば満足されぬ心には徹底と統一が欠けている。大きくいえば、判断Ⅱ実行Ⅱ責任というその責任を回避する心から判断をごまかしておく状態である。趣味という語は、全人格の感情的傾向という意味でなければならぬのだ

が、おうおうにして、その判断をごまかした状態の事のように用  
 いられている。そういう趣味ならば、すくなくとも私にとつては  
 極力排斥はいせきすべき趣味である。一事は万事である。「ああ淋しい」  
 を「あな淋し」といわねば満足されぬ心には、無用の手續があり、  
 回避があり、ごまかしがある。それらは一種の卑怯ひきようでなければ  
 ならぬ。「趣味の相違だからしかたがない」とは人のよくいうと  
 ころであるが、それは「いったとてお前に解りそうにないからも  
 ういわぬ」という意味でないかぎり、卑劣極まっていたい方といわ  
 ねばならぬ。我々は今まで議論以外もしくは以上の事として取扱  
 われていた「趣味」というものに対して、もつと嚴げんしゆく肅な態度  
 をもたねばならぬ。

すこし別なことではあるが、先ごろ青山学院で監督か何かして  
いたある外国婦人が死んだ。その婦人は三十何年間日本にいて、  
平安朝文学に関する造詣ぞうけい深く、平生日本人に対しては自由に雅が  
語ごを駆使して応対したということである。しかし、その事はけっ  
してその婦人がよく日本を了解りようかいしていたという証拠にはなら  
ぬではなからうか。

詩は古典的でなければならぬとは思わぬけれども、現在の日常  
語は詩語としてはあまりに蕪雜ぶざつである、混乱している、洗練され  
ていない。という議論があつた。これは比較的有力な議論であつ  
た。しかしこの議論には、詩そのものを高価なる裝飾品のごとく、



ともかくにも、明治四十年代以後の詩は、明治四十年代以後の言葉で書かれねばならぬということは、詩語としての適不適、表白の便不便の問題ではなくて、新らしい詩の精神、すなわち時代の精神の必要であつた。私は最近数年間の自然主義の運動を、明治の日本人が四十年間の生活から編みだした最初の哲学の萌芽であると思う。そうしてそれがすべての方面に実行を伴つていたことを多とする。哲学の実行という以外に我々の生存には意義がない。詩がその時代の言語を採用したということも、その尊い実行の一部であつたと私は見る。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

むろん、用語の問題は詩の革命の全体ではない。

そんなら（一）将来の詩はどういうものでなければならぬか。

（二）現在の諸詩人の作に私は満足するか。（三）そもそも詩人とは何ぞ。

便宜上私は、まず第三の問題についていおうと思う。最も手<sup>てつと</sup>取<sup>りばや</sup>早くいえば私は詩人という特殊なる人間の存在を否定する。

詩を書く人を他の人が詩人と呼ぶのは差<sup>さしつかえ</sup>支<sup>つか</sup>ないが、その当人

が自分は詩人であると思つてはいけない、いけないといつては妥<sup>た</sup>当<sup>とう</sup>を欠くかもしれないが、そう思うことによつてその人の書く詩

は墮落<sup>だらく</sup>する……我々に不必要なものになる。詩人たる資格は三つ

ある。詩人はまず第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」

でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ。そうしてじ

つに普通人のもっているすべての物をもっているところの人でなければならぬ。

いい方がだいぶ混乱したが、一括かつすれば、今までの詩人のように直接詩と関係のない事物に対しては、興味も熱心も希望ももっていない——餓うえたる犬の食を求むるごとくにただただ詩を求め探している詩人は極力排はい斥せきすべきである。意志薄弱なる空想家、自己および自己の生活を嚴げん肅しゆくなる理性の判断から回避している卑怯者、劣敗者の心を筆にし口にしてわずかに慰めている臆病者、暇ある時に玩おも具ちやを弄もぶてよてうな心をもつて詩を書きかつ読むいわゆる愛詩家、および自己の神経組織の不健全なことを心に誇る偽に患せ者かん、ないしはそれらの模倣も者ほう等しや、すべて詩のために詩

を書く種類の詩人は極力排斥すべきである。むろん詩を書くということは何人にあつても「天職」であるべき理由がない。「我は詩人なり」という不必要な自覚が、いかに従来の詩を墮落せしめたか。「我は文学者なり」という不必要な自覚が、いかに現在において現在の文学を我々の必要から遠ざからしめつつあるか。

すなわち真の詩人とは、自己を改善し自己の哲学を實行せんとするに政治家のごとき勇氣を有し、自己の生活を統一するに実業家のごとき熱心を有し、そうしてつねに科学者のごとき明敏なる判断と野蠻人やばんじんのごとき卒直なる態度をもつて、自己の心に起くる時々刻々の変化を、飾らず偽らず、きわめて平氣に正直きに記載さいし報告するところの人でなければならぬ。

記載報告ということは文芸の職分の全部でないことは、植物の採集分類が植物学の全部でないと同じである。しかしここではそれ以上の事は論ずる必要がない。ともかく前いったような「人」が前いったような態度で書いたところの詩でなければ、私は言下に「すくなくとも私には不必要だ」ということができる。そうして将来の詩人には、従来 of 詩に関する知識ないし詩論は何の用をもなさない。——たとえば詩（抒情詩）はすべての芸術中最も純粹なものであるという。ある時期の詩人はそういう言をもつて自分の仕事を恥かしくないものにしようとするのだ。しかし詩はすべての芸術中最も純粹なものだということは、じょうりゆうすい蒸溜水は水の中で最も純粹なものだということと同じく、性質の説明にはな

るかもしれないが、価値必要の有無の標準にはならない。将来の詩人はけつしてそういうことをいうべきでない。同時に詩および詩人に対する理由なき優待をおのずから峻しゅんきよ拒すべきである。いっさいの文芸は、他のいっさいのものと同じく、我らにとつてはある意味において自己および自己の生活の手段であり方法である。詩を尊貴なものとするのは一種の偶像ぐうぞうすうはい崇拜である。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

詩はいわゆる詩であつてはいけない。人間の感情生活（もつと適当な言葉もあろうと思うが）の変化の厳密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。したがつて断片的でなければならぬ。――ま•と•ま•り•が•あ•つ•て•は•な•ら•ぬ。　（ま•と•ま•り•の•あ•る•詩•す•な•わ•ち•文•芸



そうして私は、私自身現在の諸詩人の詩に満足するか否かをい  
 う代りに、次の事をいいたい。——諸君のまじめな研究は外国語  
 の知識に乏<sup>とほ</sup>しい私の羨<sup>うら</sup>みやみかつ敬<sup>けい</sup>服<sup>ふく</sup>するところではあるが、諸  
 君はその研究から利益とともにある禍<sup>わざわ</sup>いを受けているようなこと  
 はないか。かりにもし、ドイツ人は飲料水の代りに麦酒<sup>ビール</sup>を飲むそ  
 うだから我々もそうしようというようなこと……とまではむろん  
 いくまいが、些<sup>さ</sup>少<sup>しょう</sup>でもそれに類したことがあつては諸君の不名  
 誉ではあるまいか。もつと卒直にいえば、諸君は諸君の詩に關す  
 る知識の日に日に進むとともに、その知識の上にある偶像<sup>こしら</sup>を拵<sup>こしら</sup>  
 上げて、現在の日本を了解することを閑<sup>かん</sup>却<sup>きやく</sup>しつつあるような  
 ことはないか。両足を地面<sup>じべた</sup>に着けることを忘れてはいないか。







# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集 12 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月7日初版発行

1972（昭和47）年9月10日9版発行

入力：j.utiya

校正：八卷美恵

ファイル作成：野口英司

1998年11月11日公開

2005年11月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 弓町より

石川啄木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>